

フェイトとフェイト

「あ、気がついた・・・大丈夫？」

キャラは夢見心地で気がついた。ぼやけた視界にフェイトが心配そうに見つめている様子が映る。どうやらベンチに寝かされているようで、頭の柔らかい感触と、目の前で心配そうにのぞき込んでいるフェイトさんの様子から、ひざ枕されているようだと言った。思った。

キャラはどうして、気を失って倒れたかと理由を考えようにも、なんだか頭の中がボヤツとして上手く考えられない。

「フェイトさん、すみません。ちょっと気を失ってみたいで・・・」
「大丈夫？ どこも痛くない？」

フェイトの声はなにかとても戸惑っているような様子だった。

「はい。大丈夫ですから」

キャラはまるで本当のお母さんの様な優しい声で気遣ってくれるフェイトに少し感動していた。

ひざ枕してもらいながら、しばらく経つとキャラは少しずつ状況が飲み込めてくる。

そういえば、秘密の鍵を封印するときに発生した巨大な魔力フィールドに飲み込まれて気を失ったんだと思いだした。それでも、フェイトの慌てた様子もないことから、秘密の鍵を無事に封印出来たんだなと思った。

「フェイトさんにひざ枕してもらおうのもなんだか、久しぶりですね」

キャラは視界が早く戻るようにと目をつむって、以前フェイトにひざ枕してもらったときのことを思い出しながら答えた。そういえば以前は耳かきをしてもらっていた。

「……」

目をつむりながらフェイトの戸惑うような雰囲気を感じ取ったキャラは、何かいけないことでも聞いたかなと思った。そこで、ちょっと質問を変えてみる。

「フェイトさん、ロストロギアは、上手く封印できましたか？」

「ロストロギア？ なんのことかな？ 私のこと知ってるの？」

フェイトは慌てたような声をだして意外な答えを言った。

キャラ達はロストロギア封印の任務で海鳴市にやってきている。いくらなんでも、さっきの今だ。フェイトさんが任務を忘れるわけがないとキャラは思った。それに、フェイトさんのことを知っている？ いったいどういふことだろう……

何か底知れぬ異変に気づいたキャラが目を開けると徐々に視界が戻ってくる。

しばらくしてキャラの瞳に映ったのは、金色の髪がさらさらと印象的なキャラと同一年



ぐらいの女の子だった。

キャラは驚いた。その目の前に現れた女の子はフェイトによく似ており、しかもいつだったか写真で見たフェイトの子供の頃のような顔立ちをしていた。

それに声だってフェイトとそっくりだし。

おまけに穏やかな雰囲気まで、うり二つだ。

キャラは思わず目の前にいる人物をフェイトの妹さんかどうか確かめようとしたが、あわてて言葉を飲んだ。なぜなら、フェイトに妹がいることは聞かされていない。

何となくキャラは、このままひざ枕をしていた気分だったが大好きなフェイトに似ているとはいえさすがに初めてあった女の子に、このままひざ枕してもらっているのもなんだか気が引ける。

キャラは女の子のひざから起き上がり、あわてて考えた。

「ごめんなさい、人違いでした」

この女の子に対して何をどういって良いかさっぱり分からない……少し経ってやっと思いついた。そうだ、こんな時は、まずは自己紹介からだ。

同年代の友達がいらないキャラにとって、お友達の名前を呼び合うところからはじめるフェイトから前に教わっていた。

「ええっと、私の名前はキャラ・ル・ルシエといいます。あなたは？」

キャラはしばらくの沈黙のあとやつとの事でその言葉が口からでた。初対面の人に自分の名前を言うのは、なんだか恥ずかしかった。

キャラは、モジモジしながら女の子を見ると、その女の子は怪訝けげんそうな顔をしてこう答えた。

「私は……フェイト……フェイト・テスタロツサ……ハラオウン……」

目の前の女の子から名前を聞いたキャラは卒倒そつとうしそうになった。驚いたなんて言う比じゃなかった。状況が全く飲み込めない。まさか、夢を見ているのだろうかとも思った。

「ええっと、キャラは変な夢でもみたのかな？」

フェイトと呼ばれる女の子の言葉がキャラの混乱に追い打ちをかけた。夢の中で夢を見ているのかと聞かれる夢って、いったいどんな夢だろうと思った。

「大丈夫？ そこに倒れていたんだよ」

フェイトと名乗った女の子が、アーチ型の橋の上を指さした。キャラが絶句ぜっくしていると、女の子はさらに言葉を続けた。

「もしかして、なにか怖い目にあつたのかな？」

女の子の問いかけにキャラはふるふる首を横に振った。